

平成30年12月6日

「上手な医療のかかり方を広めるための懇談会」からの提案(案)

なぜ今、医療のかかり方なのか？上手な医療のかかり方とは何か？

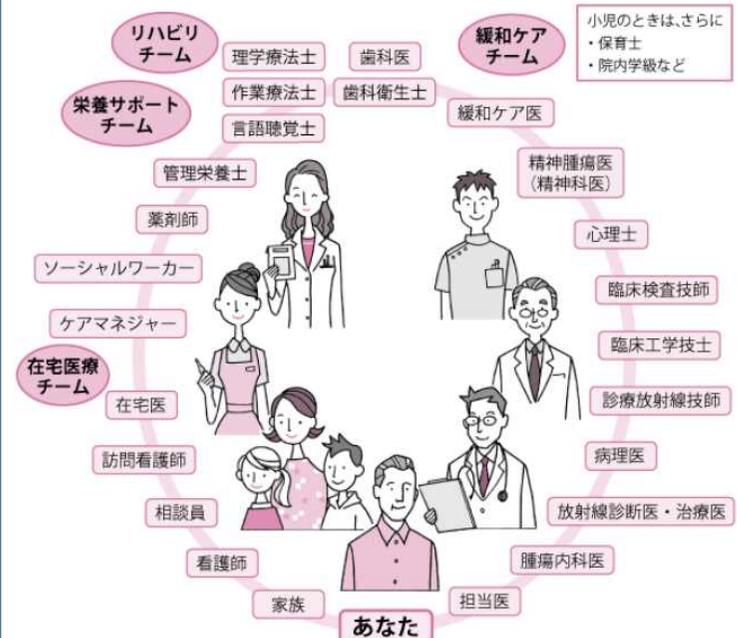
- 医療に関する様々な情報が氾濫するとともに、医学の進歩、専門分化に伴って自分に必要な医療を見出し、賢く使いこなすことが難しい時代。高齢者や子どもをはじめ、自らの心身の状態に最適な医療機関や医療従事者を「選択」し、円滑に「コミュニケーション」を取り、医療従事者と「協働」する関係性を築くことがこれまで以上に重要。
- それらが実現されたとき、患者にとっても「納得」できる医療を受け、「満足」することが可能となる。
- 他方、有限な社会資源である医療機関や医療従事者への負荷を適正化することにより、患者に対するケアの質と量がより一層高まることも重要。
- これらを実現し、「困ったらすぐ医療機関に駆け込み、医師の言うことに従い、任せっきり」という医療のかかり方から、「自分の心身の状況に応じて適切な時期と医療機関を自ら選び取り、医師とパートナーとして、一緒に改善を目指す」という医療のかかり方へと変革することが必要。それによって、自分や家族の健康や生き方を能動的にデザインすることができる。

何をすべきか？

- 自分や家族が必要な医療情報へいつでもどこでも誰でも簡単にアクセスでき、必要なサービスや最適な医療機関・医療従事者を自ら選択できる仕組みを構築
- 陥りがちな現在の医療のかかり方の課題(例:過度な夜間や休日診療)による患者側・医療側双方へのデメリットや、望ましいあり方との比較について分かりやすく整理し、アクセスしやすい媒体を通じて広く伝達
- 現状の医療のかかり方の副作用として医療現場が疲弊・混乱しがちな状況を、医療安全や質の観点から考え、議論するための素材(動画等)を提供
- 上手な医療のかかり方を実現するため、医療従事者とのコミュニケーションに当たっての望ましい姿勢、看護師や薬剤師などを含めた医療従事者の役割・専門性等の理解を促し、患者と医療従事者によるチームとしての円滑な協働を支援する仕組みを確立

「何でも医師頼み」から「医師達とともに」

- 医療提供者は、チームとして患者と伴走し、自分や家族の問題解決のために一緒に考えるパートナー。
- 忙しい医師に聞きにくいことでも、日頃の体調管理のことは看護師に、薬のことは薬剤師に聞くなど、他の職種の専門性を活かす余地は大きい。
- これまでの「何でも医師頼み」から、「医師達とともに」へと考え方を改め、専門職の役割を知り、チーム医療のサポートを上手に引き出し、活用することが重要。



「上手な医療のかかり方を広めるための懇談会」からの提案(案)



課題
 普段医療にあまり縁のない人、忙しい人などは
 関心を持つのが難しい

あるべき姿
 自然に「上手な医療のかかり方」の情報に接することができる

- 各世代ごとのインフルエンサーを「上手な医療のかかり方アンバサダー(仮)」として任命し、賢い医療の使い方をわかりやすく紹介します。
- 「上手な医療のかかり方月間(週間)」を設定し、医療関係者、保険者、自治体などと協力して、イベントやセミナーを開催する等、上手な医療のかかり方に触れる機会を増やします。
- 医療を受ける患者と、提供する医療者、つなぐメディアの本音を話し合う、皆さんが参加できる場を作り、納得できる医療と一緒に考えられるようにします。
- 緊急時の電話番号などをまとめた家庭内ポスターやマグネットを、デザイナーたちの競作プロジェクトとする等、話題性のある形で作り、皆さんが家庭で使いたいと思えるものを作ります。

課題
 メディア等による広範囲の周知では、
 行動変化に結びつくための具体的理解にまで至らない

あるべき姿
 普通の生活の中で身近な人から直接情報を得て、
 賢い医療の使い方を理解する

- 【全世代へ(ロコミ)】
 医療のかかり方について習得した者を認定し、身近な人が医療のかかり方を教えてくれる環境を作り、自分で知ることが大変な人も上手に医療にかかれるようにします。
- 【子どもの保護者へ】
 母子保健や産科・小児医療など、保護者が子どもの健康や医療について考える場面で、直接講座等の形で詳しく医療のかかり方が伝わるよう、全国の自治体に促していきます。
- 【働く人へ】
 企業等における健診の場で、医療のかかり方の情報や、自社で行われている健康経営のための取組等について紹介してもらうよう呼びかけ、働く人が健康で上手に医療にかかれるようにします。
- 【若い世代へ】
 ①学校での社会保障教育や、②就職時に企業や保険者等から、賢い医療の使い方を伝えることにより、若いうちから上手な医療のかかり方が分かるようにします。

課題①
 どういう状態・症状のときに医師を受診すべきか、
 どの医療機関へ行くべきか、が分からない

あるべき姿①
 信頼できる情報源を基に自ら選択できる

課題②
 現在の医療のかかり方の課題(過度な夜間や休日
 受診)による医療側・患者側双方へのデメリット

あるべき姿②
 ベストな時間・場所で医療にかかることができる

課題③
 医師との適切なコミュニケーション(症状の伝え方、
 やり取りの仕方)が分からない

あるべき姿③
 医師・看護師・薬剤師等が
 フラットに協働し問題を解決できる

- 市民がやること**
- #8000や#7119にまず相談します。
 - 信頼できる医療情報まとめサイトを活用します。
 - 花粉症のときは市販されている薬で対応するなど、セルフメディケーションを心がけます。
 - 風邪のときに、抗生物質をもらう目的の受診は控え、出社や登校せずに自宅で休養します。
 - 日頃の体調管理のことは看護師に、薬のことは薬剤師に聞きます。
 - 自分の聴きたいことを紙に書きだしたりウェブ問診票などで整理し、ためらわないうで医師に聞く習慣を持ちます。

- 民間がやること**
- AIを活用した相談アプリの開発を進めます。
 - ユーザーフレンドリーなまとめサイトや患者相談体制の構築を支援します。
 - 健診時に医療のかかり方研修を行います。
 - 健康経営の一環として、フレックスタイム制や休暇が取得できるといった柔軟な働き方に関する指標を可視化します。
 - インフルエンザの診断書を強制しませんが、

- 医療提供者がやること**
- 待合室、健診(母子、小児、学校、職域)など、あらゆる機会を捉えて上手な医療のかかり方を啓発します。
 - 電話相談や医療情報まとめサイトのコンテンツの作成監修と品質保持を行います。
 - タスクシフト・シェアを通じて、患者相談体制について地域の医療機関やコメディカルなどと連携を促進します。
 - 健康管理のために、きちんと休暇をとることを恐れませんが、

- 行政がやること**
- #8000や#7119などの相談ダイヤルの周知を徹底します。
 - 信頼できる医療情報まとめサイトや患者相談体制の認証や支援をします。
 - 医療のかかり方を議論するための素材(動画等)や場を地域で提供します。
 - 医師の健康管理と労務管理を徹底します。
 - 看護師や薬剤師などが能動的に活躍できるための制度を確立します。
 - 社会保障教育の中で、上手な医療のかかり方についても盛り込みます。